

算盤組立職人

Vol.06 職人の技



それはそれは暑い8月1日に修行は始まった。
「今からやるからよう見とけよ」
一握りの熟練した職人から発せられる凄まじいオーラを纏いながら小刀をそろぼんに入れていく、...ということもなくあつてなくその工程は終わった。
「な、簡単やろ」
「は、はい!?!」
確かに簡単な作業であった。小刀をわずかに4回入れただけ。スツと1本の線がそこに現れた。
「じゃあやってみ」
小刀とそろぼんが手渡された。なんてことない単純明快な作業である。絶対できる。いや、やってやる。己に気合を入れて、いざその工程をやってみた。

「で、どうだったんだ?」
「いや、無理だったよ...」
完膚なきまでにやられた、という状況だ。
「全くもって小刀で削れる気配がしない。」
「その師匠が使っている道具を使つたんだろ? じゃあできないわけじゃないじゃないか」
我ながら素人の考えだと思つたが聞いてみた。
「無理無理無理無理。小刀が進まないだよ、全然。」



そういえば、そろぼんの材料はかなり固い木だと聞いたことがあった。
「固くて削れないと。」
「竹ひごを削つた感覚じゃ削れないと。」
「コクコクコクコク。」
「...力の差か?」
「それ!、ホントにどんだけ力入れてんだよ!?!」
とても70代中盤とは思えないらしい。
「ま、それが『職人』つてやつだろ?」
「だよな、佐藤くん。」
ため息ひとつ。
「佐藤くんよ、僕は負けないよ。あきらめたらそこで試合タイムアウトだよ。」
「あー、そうだな。」
何か違うのだが、今はそれに触れないでおこう。
「根気と努力の塊の僕をなめるなよ!?!」
「そう、彼の根気と努力の凄さは相当なものである。到底、常人のそれではない。できれば敵に回したくないね、ホント。」
「で、10月の第2土曜日なんだけど」
「おう。」
「なぜか分かんのだが、プレゼンする事になった。」
「お、おう?」
「は? 喋るのが苦手なお前が、いや全くもって人前で喋らないお前が、いや喋る

のが嫌だからプログラマになつたお前が人前でプレゼンだど!?!」
「佐藤くんよ、そこまで言われると僕は少ししよんほりしてしまうよ。」



profire 高山辰則(龍雲)

2014年より、伝統工芸士/宮本一廣氏のもとで修業。

2015年に播州小野算盤工房shinを立ち上げる。

「全ての人ではなく、できるだけ多くの人に気に入ってもらえる商品を作れ」という師の言葉を継承し、伝統的

工芸品づくりを通じて、その歴史や技術を後世に伝えるために日々努力をしています。

播州小野算盤工房shin / 高山辰則(龍雲)

<https://tkymtatz.wixsite.com/abacus>